貧者とともに生きる
—F. ヴァンデルホフ『貧しい人々のマニフェスト』を読む—

北野 収
獨協大学
shukitano1@dokkyo.ac.jp

キーワード： フェアトレード、連帯経済、知識人、解放の神学、メキシコ

１．はじめに

オランダ人カトリック司祭のフランツ・ヴァンデウホフは 1980 年来、30 数年にわたり、南部メキシコ・テワンテペック地峡のコーヒー小生産者と共に暮らし、世界初のフェアトレード認証ラベル（マックスハベラー、現 FLO）を設立するとともに、国際フェアトレード運動、小規模農民の自立支援のネットワーク化における理論・実践面での指導者として活動してきた。欧米である程度のフェアトレードの主流化が進展する一方、現実には、その父ともいえる彼の世界観・価値観とは異なった展開もみられる。

本報告では、彼が 2012 年にカナダで出版した英語版 *Manifesto of the Poor: Solutions from Below*（仏語版 2010 年、邦訳『貧しい人々のマニフェスト—フェアトレードの思想』北野訳、近刊）を読み、彼のテクストの背後にある開発観、世界観を思索する。一読しただけでは偏向的で、反資本主義的・理想主義的・反開発的としか映りかねない彼のテクストは、30 余年にわたるメキシコでの農業実践、それ以前のオランダ、カナダ、チリでの生活と時代との対話の中から紡がれたフェアトレードの思想である。

第三世界の草の根指導者には、ヴァンデルホフのようなインテリ＝脱プロ知識人が地域コミュニティに入り込んだ例が少なくない。一見、地域コミュニティ内部からの要求とみられるものが、外部から持ち込まれた価値観によるものであった、または、それとのハイブリッドであったことを示唆する人類学研究もある。本報告は、こうした人類学的な視点とは別の観点、すなわち、時代と個人の対話——ヴァンデルホフの人生と彼が生きた時代——を意識して、彼の言葉の背後にある価値観を探る。外来・内発という二項対立を止揚し、貧者に寄り添い共に生きることの開発学的な意味をさぐる。

２．開発をめぐる天動説と地動説

開発を考える時、私たちは無意識に天動説的世界観を前提にしがちである。天動説とは受益者たる途上国の現場の人々からみて他律的な働きかけという意味である。

ある書評で私は次のような問題提起をしたことがある。「自然科学において、①所与の環境（≒容器）を前提としてそこに生息する生物（≒中身）が与えられた条件にどのように適応・反応するかを分析すること、②生物の営みがそれらが生活する環境にどのような影響や変化を及ぼすかを分析すること、という２つの研究のアプローチが存在することは容易にイメージができる。もし、環境を地域社会に、生物を人間に置き換えてみたらどうなるであろうか。これまでの現地調査を踏まえたいわゆる「実証研究」の多くは①に相似し

ている。そこでは、私たちは、「容器」を規定する「持続可能性」や「農村地域」といった概念も所与のこととして理解している。では、(開発学を含む) 社会科学において②のアプローチは存在しえないのだろうか。これは、「社会科学 (開発学) は何を研究対象とするべきか」という認識論的な問いかけである」(北野　2013a:23、一部語句追加)。

一般に開発に関する社会科学は「開発を科学知に基づいて実施されるものであり、現地に適用される技術的知見だけでなく、プロジェクト概念そのものおよびその運営管理に至るまで、客観的、合理的に遂行されなくてはならないとされる。(略)「プロジェクト」という狭義の開発論の範疇を広げたとしても、一般的には、ミクロ、マクロの諸政策は価値中立性を装った社会工学的な営みだと理解されている」(北野　2016)。

だが本来、開発は地動説であるべきではないか。受益者の潜在力に働きかけ、自律的な変化への働きかけを支援する。環境が生物を規定するだけでなく、生物が環境を逆規定する。これは金魚が主体化し容器 (社会経済環境) のあり様を改変することである。

３．“寄り添うこと”とは

現地の人々に寄り添うとは、そこにある多様あるいは固有の価値にも耳を傾け、必要に応じて外部のそれと接続ができる関係性をつくることである。前節の立場を採れば、開発は価値中立的な社会工学ではなく、価値選択的な人間的営為である。どのような発展を望むのかは、人々が選択する価値に連動している。人間的営為である以上、開発にかかわる特定の個人の経験や価値観はその人の仕事や実践にかならず影響し、そのことは人間社会を改良する原動力の１つになりえる。

開発学において“人と思想と実践”なるものが話題になることはあまり聞かないが、私は“人と思想”と“実践”との相互作用に着目していくつかの事例を研究してきた (北野 2008、2011)。開発が価値選択的な人間的営為としての社会の変革であるとすれば、その影響が測定できない程些細なものであったとしても、上記の金魚の例えと同様、開発に関わる特定の個人は社会を「変える」ことに与する。私はこの特定の個人を“草の根民衆知識人”と定義し、動機付けされた現地の人間、外部支援者の双方を想定した (北野　2008)。

では、選択される価値は誰がる造るべきか。一般には外来型・内発型の二項対立の答えが用意される。しかし外来のものが地域内のそれとハイブリッド化することもあれば、地域内部のものが何らかの媒介者･翻訳者の助けを得て外部のそれに接続されることもある。媒介者はさまざまなパターンが想定できるが、先進国から現地に移住し住民に寄り添う知識人もその１つである。私たち外部者が現地の人々に寄り添うためには、膨大な時間と労力 (言語習得を含む) を要し、実際にそれを行うことは極めて難しい。ヴァンデルホフのように実際にそれを成し遂げた人物の思想には――そこには選び取られた、あるいは、創造された価値が含まれていると想定――開発学徒である私たちが学ぶべき事柄がある。

４．ヴァンデフホフが生きた時代と空間

貧者の自立と解放を唱える思想は、彼が学び生きた時代と場所という“空間”における個人 (ヴァンデルホフ) と容器 (時代、場所) との対話・交渉から生まれたと考えられる。

彼は 1939 年にオランダの借地農の家に生まれた。一家は厳格なカトリック信者で、学校

もカトリック系だった。借地農としての貧困と戦争体験という幼少期の経験は彼に多大な影響を与えた。10 才の時、聖職者になることを決意。神学校、兵役を経て大学で経済学を学ぶ。“1968 年世代”として学生運動に参加。カナダでの教職経験を経て、1970 年に南米チリに移る。労働司祭としての実践活動に入り、ラテンアメリカで勃興していた解放の神学に出会う。1973 年、ピノチェトによる軍事クーデター後、メキシコシティに移り、スラムで労働司祭の活動を再開する。メキシコのエチェベリア政権も労働運動の弾圧や治安維持の強化をしていたため、1980 年頃にオアハカ州山岳部の村に移った（北野　2008、2016）。

彼が観たのは、仲買人（コヨーテ）に脅され、搾取され、極貧にあえぐコーヒー農民の暮らしであった。農民は経済的に極貧であっても精神的には豊かであり、問題解決のための行動力や知性を備えていることを彼は見抜いた。既得権益が侵されることを望まない勢力からの脅しや妨害工作に遇いつつ、コーヒー生産者組合の設立に向けて動き出し、1983 年に UCIRI（イスモ地域先住民共同体組合）を設立（北野　2008）。この頃メキシコは 1982、84 年に債務危機、通貨危機を経験。1988 年 11 月、UCIRI とオランダ NGO との間で世界初のフェアトレード認証コーヒーが販売された。翌年、国際コーヒー協定の輸入割当制度が停止、第１次コーヒー危機が始まる。2000 年代の第２次コーヒー危機を経て、フェアトレード・コーヒーが普及する。数々の叙勲を受けたヴァンデルホフはサポテコ人等先住民の長老でもある。

５．ヴァンデルホフの言葉から

援助は要らない、私たちは乞食ではない：オランダの開発 NGO が UCIRI を訪問し何か支援は要るかと尋ねた際、農民はこう答えた。ヴァンデルホフの指摘は辛辣である。「思いやりという名の下に、自分たちの意志を貧しい人々に押し付けてしまう。（略）NGO には、非常に好意的かつ優秀で、善意に満ちあふれたスタッフもいる。だが、一般論として、彼らのメンタリティは彼らが成すべきはずだったこととは逆の方向に作用する。（略）３～５年間プロジェクトを実施し、その後ことは考えず、バトンを持ったまま帰ってしまったＮＧＯを私自身どれだけ見てきたことか。（略）彼らがやろうとしていることは、不幸という名のカーペットを持ち上げて、自分たちの存在を世に知らしめることに過ぎない」（ヴァンデルホフ　2016）。農民は大金持ちになることも、政府や NGO 等の外部からの支援に依存しながら生き続けることも望んでいない。「借り」を作らず、衣食住と尊厳を維持しながら生きる、それだけが願いだという。

情報の搾取：開発にかかわる外部者は客観的・科学的な技術をもたらす無色透明な存在ではない。そのように振る舞う人間は地域社会から情報だけを一方的に持ち去る泥棒である。外部者に当事者性を厳しく問うた指摘である。

経済は人間に奉仕すべきであり、その逆はあり得ない：経済というものは人間の生活の必要から生み出された。だが今日、私たちは経済のなかで生き、経済に奉仕することを余儀なくされている。本来、経済は人間社会に埋め込まれていたが、今では、社会が経済の荒波に翻弄される存在となった。経済が政治を動かしルールを改変し、メディアを操る。だが「経済とは、広大だが有限で閉じたシステム＝生物圏の部分集合に過ぎない。結論として、際限なき成長は不可能である」はずだ（ヴァンデルホフ　2016）。現代経済の主役は多国籍企業群である。無限の権力を手に入れた大企業が暴走しても私たちに止める手段は

なく、それに気づく機会さえ奪われてしまった。ヴァンデフホフによれば、少なくとも誇り高き貧者たちは、こうした事柄について先進国の人々以上に敏感であり、きちんとした免疫をもっているという。社会的連帯経済（SSE）とはこういった自覚と文脈から、ごく自然に生まれてきた概念である。

私はもう１つの世界の夢を描いた：彼はSSEのさらなる展開に期待する。「地球と人道性を気遣う倫理性と共通善によって支えられ、より多くの連帯に満ちた世界は可能」という。私が想起したのは「いかに人間が利己的であるように見えようとも、人間の本質の一部として、他の人の運命に関心をいだき、そして他の人の幸福を自分にとってもかけがえのないものとして感じる何らかの原理が明らかに存在している。たとえ自分が得るものが何もなくても、他の人の幸福を見るだけで嬉しいと感じる何かがあるのである」というA.スミスの『道徳的感情論』の一節である。人間の本質をどう捉えるかという点において、ヴァンデルホフは根源的なヒューマニストである。

６．むすび

私が“寄り添うこと”を改めて意識した契機は意外にもFD研修である。「FDフォーラム」への参加、いくつかの大学での研修会講師、FD 本の執筆（北野　2013b）など、ここ数年FD活動に関わる機会に恵まれ、優れた教育実践を行う何人もの教員に出会った。教員との対話と推敲をベースに自己省察と他者との関係性を文章化していく「日本語リテラシー」授業の実践（谷　2013）、学生と教員との対話の積み重ねと学生同士の批評コミュニティづくりをベースとした卒論研究指導という私自身の実践（北野　2013b）は、いずれも技法としてのライティング指導、研究指導よりも学習者の潜在能力の引き出しのための働きかけと寄り添いを重視している。ここで“草の根民衆知識人”的役割を果たすべき大学教員も、各人が生きてきた時代、場所等の文脈に規定された存在である。開発（学習）の主体化ということを考えれば、技術移転や社会工学や教授技法という視点を超えて、開発（教育）行為にかかわる者の当事者性が問われるべきである。

ヴァンデルホフの「マニフェスト」の背後にある思想は、フェアトレードのみならず、人間の営為としての開発を捉え直すための多くの示唆を含んでいる。

【引用文献】

ヴァンデルホフ、F.（2016）『貧しい人々のマニフェスト』北野収訳、創成社（近刊）。

北野収（2008）『南部メキシコの内発的発展とNGO』勁草書房。

__（2011）『国際協力の誕生―開発の脱政治化を超えて』創成社。

__（2013a）「農村研究のパラダイム転換を展望する」『農業問題研究』pp.23-33.

__（2013b）「自分のテーマを２年間かけて卒論に仕上げる」関西地区FD連絡協議会他編『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房、pp.148-169.

__（2016）「解説　認証ラベルの向こう側に思いをはせる」ヴァンデルホフ、F.（2016）『貧しい人々のマニフェスト』創成社（近刊）。

谷美奈（2013）「自己省察としての文章表現」関西地区FD連絡協議会他編『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房、pp.95-123.